



高橋 博ほか編
沿岸災害の予知と防災

—津波、高潮にどう備
 えるか—

白亜書房, 1988年6月刊
 408頁, 3,600円

本書は沿岸防災の仕事にかかわりを持つ広い範囲の読者を対象として、その基礎知識と、予知、その他の対策、とについて述べたものである。現在、第一線で活躍している理、工学各分野の学者、専門家が分担、執筆し、高橋 博、竹田 厚、谷本勝利、つじよしのぶ、磯崎一郎の各氏が編集した。その構成は次のようになっている。

- 第一章 沿岸災害概説
- 第二章 津波
- 第三章 高潮災害
- 第四章 波浪災害

第五章 その他の沿岸災害

第五章には強風、流水、濃霧、異状潮位、あびき、急潮、塩害、および赤潮と、広い範囲の災害の説明が含まれている。

説明の中には数式も多少含まれているが、図表、写真などを多く用い、ていねいに述べられているので、専門知識のない読者にも容易に理解できると思われる。とくに、執筆者のなかに、いま学界などで活発に研究や調査の結果を発表しつつある人々が多く含まれているので、記述がいきいきとしており、最新の知識にまで筆が及んでいる。天気の話者にもおすすりできる内容である。

ただ、少し気になるのは第二章の津波に関する部分が全体のほぼ半分のページ数をしめ、高潮、波浪に関する章のページ数はそれぞれ、その1/3でいどに過ぎないことである。津波に重点が置かれているとしても、本書の表題を考えれば、もう少し高潮、波浪についての説明を深めるべきではなかったであろうか。

(宮崎正衛)

(p. 39 からつづく)

のようになり、以後見取り図のように変化した。

この時の状況は気象要覧(1941)に詳しく報告されているが、所長以下わずか数人の所員が全員でこの量の観測をする姿を見て、これは面白そうだと思って気象をやってみようと思ったのである。こんなわけで量については特別の感慨があるのであるが、特に、コンピューターを使った光学現象のシミュレーションの研究をやってみたらと思っていたので、浅野のハロー現象についての紹介を興味深く読んだのである。そして、宮津で観測された見取り図のような異常量の時の氷晶の分布はどのようなであったかも説明して貰えれば、有難いものである。そ

れにしても、浅野も指摘しているように、私たち「気象」関係者も、気象光学をはじめ他の地球物理現象にも、もっと関心を持つようにしたいものである。

参考文献

- 浅野正二, 1988: 紹介: 根室で観察されたハロー現象, 天気, 35, 326-328.
- 全気象労働組合気象研究所分会, 1984: チビッコ2000号記念号.
- 宮津観測所, 1941: 異常日暈報告, 気象要覧, 501, 616-618.